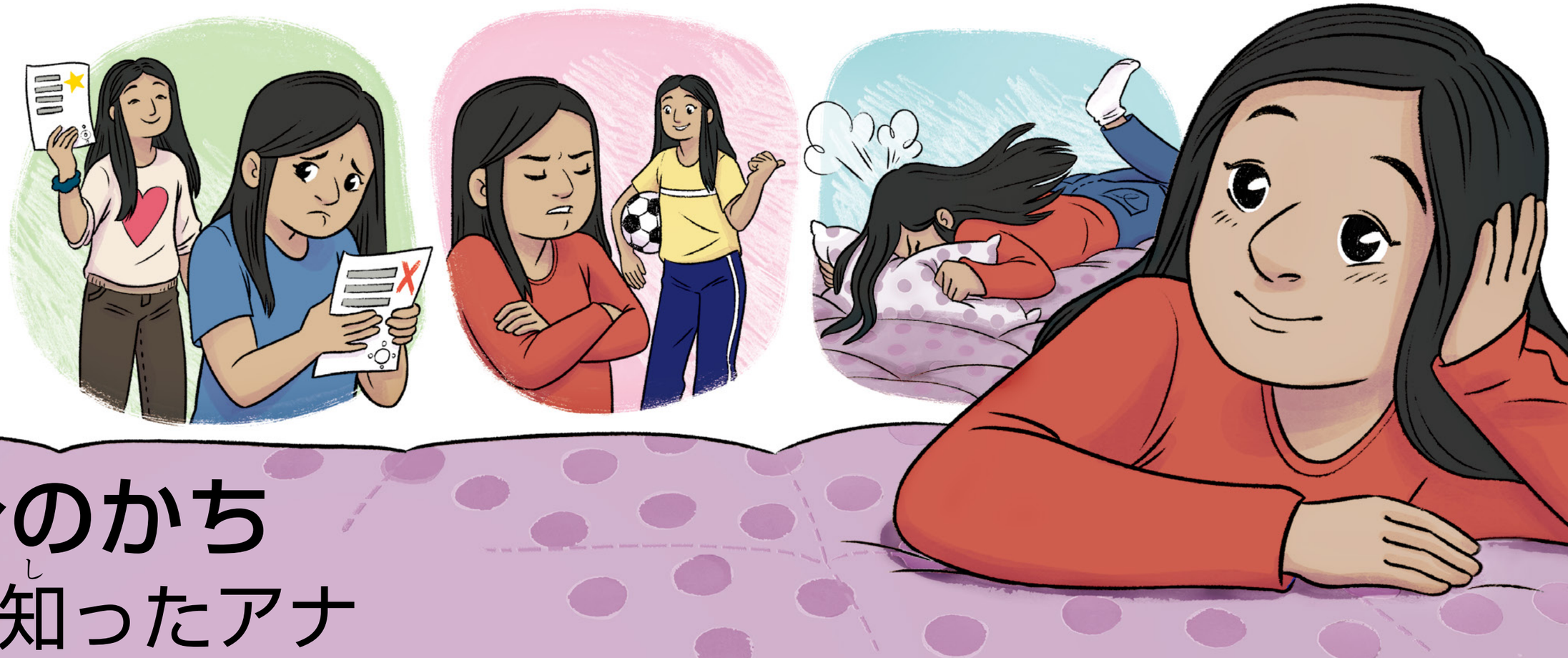

なぜミラは
いつもこんなに
完璧なの？

自分のかち を知ったアナ

ルーシー・スティーブンソン・イーウェル
（ほんとうにあった話をもとに書かれました）

このお話は，カナダでの出来事です。

「ママ，聞いて。」アナのお姉さんのミラがそう言って，学校の通知表を見せました。「すべての科目でＡを取ったの！」

アナは目を丸くしました。なぜミラはいつもこんなに完璧なの？

「それはすばらしいわね」とママが言いました。「あなたをほこりに思うわ。」そしてママはアナの方を向きました。「成績はどう？」

アナはママに通知表をわたしました。「良かったよ」と，アナはうつむいて言いました。アナは学校でがんばりました。でも，ミラのように完璧な成績ではありませんでした。

「あなたのこともほこりに思うわ」とママは言って，アナをだきしめました。

わたしの気持ちを和らげようとして言っているだけよ，とアナは思いました。ミラはいつでもアナよりかしこいのです。

でも，ミラの方が良いのは学校の成績だけではありません。*何もかも*良いのです。友達がたくさんいます。かみがきれいです。スポーツが上手です。みんなミラのことが大好きです。

アナの両親は助けようとしていました。

「アナはとても大切だよ」と，パピはよく言います。

「あなたは美しくてかしこい子よ」とママはよく言います。

でも，アナは自分のことを大切だとも，美しいとも，かしこいとも感じません。ミラとくらべたら，そんなことはないのです。

ある日，アナとミラはボードゲームをしていました。「またミラの勝ちみたいね」とアナはうめきました。

「何かほかのことをして遊ばない？」とミラはたずねました。「外に出てもいいし。サッカーならアナの勝ちよ！」

「いや！」アナがぴしゃりと言いました。「負けるのは，もううんざり。いつもミラがわたしよりもよくできるのにも，もううんざり。」アナははらわたがにえくり返るように感じました。

ミラは目を丸くしました。「ごめんなさい……」

ミラが言い終える前に，アナは反対を向いて，自分の部屋に走って行きました。「わたしはミラみたいに完璧にはなれない！」とアナは言って，ドアをバタンとしめました。

アナはまくらに顔をうずめてベッドに横たわりました。とてもおこっていたのです！

何度か深呼吸をしました。落ち着くと，アナはひざまずいて，おいのりをしました。「愛する天のお父様」とアナは言いました。「どうか助けてください。わたしはいつもミラのことをうらやましく思っています。」声が小さくなりました。「わたしは決して十分にすぐれた人にはなれないと感じています。わたしをほんとうに愛しておられるのですか？」

頭からつま先まで，温かい気持ちが広がりました。そのとき，ある考えが思いうかびました。天のお父様は人々を愛しておられますが，それはみんなが御自分の子供だからです。いちばんすぐれているからではありません。きっと，アナは愛されるために，ほかの人よりもすぐれている必要はないのです。アナは今，愛されているのです。

アナはひざまずいたままでいました。この良い気持ちが消えないでほしいと思いました。天のお父様はアナを*ほんとう*に愛しておられるのです。とてもたくさん。

そのとき，ドアをやさしくノックする音がしました。ママでした。ママはアナとならんで，ベッドにすわりました。「おこったんだってね。」

アナはうなずきました。「うん。でも，今は気分が良くなった。ミラが良い成績を取ったり，勝ったりしたことでおこってはいけないって分かっているわ。おいのりをして，とても助けられたの。」

ママはうでをアナにまわしました。「おいのりをして，どんな気持ちだった？」

「良い気持ち」とアナは言いました。「わたしは天のお父様にとってほんとうに大切なんだと感じたわ。」

ママはアナを引きよせました。「あなたはいつだってとても大切よ。天のお父様にとっても，わたしたちにとっても。でも，今，*あなた*がそのことを知ってくれてうれしいわ。」

「わたしも。どなってごめんなさいってミラに言うわ。」アナはにっこりしました。「そして，サッカーをしたいか聞いてみる！」

イラスト／マリナ・マーティン